【勤務参考】48　　１５．１０．１７

技術開発官（船舶）

ユーモア感覚

（「産経抄」筆者石井英夫氏の記事）

作家の阿川弘之氏が「海軍軍人には大変ユーモアがあった」と言っておられた。はたして現在もそうだろうかと問われれば、素直にイエスとは答えられない。そこで、日頃産経新聞を購読する人にはファンが多いと推察するが、その筆者が「正論」のなかでユーモアについて論じた部分があったので紹介し、諸官にユーモアについて少し考える機会を与えたい。（以下原文を掲載する。）

【ユーモアを一つまみ】（雑誌「正論」蛙の遠めがね）；石井英夫著）

「平成の大合戦」と称して日本各地で町村合併の話が盛んだが、中には都道府県の単位でもその種の話題が持ち出されているようだ。

これは広島県と島根県との話、両県は中国地方で南と北で接している。実話だが、ある日のこと、島根県の某県会議員が広島側の県議にこう持ちかけた。

「お前さんとこと合併さが（しよう）とおもっちょうだども、名前どげすうだ？」

広島がいった。「広島の広と島根の島をとって、広島県でええじゃろ」と。

すると島根が巻き返した。「いやいや、そぎゃんことなら、広島の島と島根の根をとって島根県でよかろうがね」と。

こう書き出したのは町村合併や地方政治の話を書こうとしているのではない。今回の「蛙の遠めがね」はジョークをテーマとしたいのである。この広島と島根の話は、いま地方自治体関係者の間で好評の小話だが、ここで笑ってくださらないと、今回の小話のマクラは惨めな失敗ということになる。

人間だけしか笑えない、犬や猫は笑わない。というと、馬は笑うではないか、ヒヒーンと高笑いするという反論がでるかもしれないが。しかし動物学者によると、そのような動作をするのはオスウマだけで、必ずその前にメスウマの尿や糞のにおいをかいだあとでやっている。つまりあのヒヒーンは性に関係があるということだ(古賀忠通『私の動物誌』)。

犬や猫や馬のことはともかく、ユーモア感覚を持ち合わせているのは人間だけであることは確かだろう。

そのユーモア感覚でも、人種や民族によって差異や濃淡があるらしい。同時通訳の第一人者、村松増美さんによると、統合されつつある欧州で「完璧なヨーロッパ人とは」というジョークが語られているそうだ。

ドイツ人のようにユーモアがあり、英国人のように料理が上手で、フランス人のように運転が静かで、イタリア人のように規律正しく、オランダ人のように気前がよく、スペイン人のように謙虚で、アイルランド人のようにいつも素面で、など・・・。

つまり各国民、各民族の特色とされている性向や気質をすべて裏返しした小咄なのだった。これを日本人を加えてみるとどうなるか。いや、やめておいた方がよさそうだ。

折からビル・アドラー編『ケネディのウイット』（扶桑社セレクト）という文庫本の新

刊がでた。
　第３５代米大統領のジョン・Ｆ・ケネディといえば、暗殺とスキャンダルばかりがクローズアップされがちである。だが当時のケネディは若さと活力と、なにより明るいユーモア精神を備えていた政治家だった。そのウイットに富んだ言葉や話しぶりを編集したものだが、拾い読みして思わずにやりとした。
　こんなのがある。
　１９６０年９月２２日、サウスダコタ州フォールズで。大統領選挙のころ。
「雨が降っていて残念です。しかし聖書に言うように、正しい者にも正しくない者にも、民主党員にも共和党員にも雨は降ります。」
　また、
「私は上院に当選してワシントンへやってきたとき、秘書にするために若い女性を幾人もマサチューセッツから連れて来ました。彼女たちは皆、結婚してしまいました。そこで、私は新しい女性たちを雇いましたが、また結婚してしまいました。ですから、もしこの地方で将来の見通しが暗いと感じている女性がいれば、私のところへ来て働いてください」
　これは大統領として。西海岸への旅で、ケネディに、ある少年が「大統領はどうやって戦争の英雄になったのですか」と尋ねた。それに彼はこう教えた。
「なりたくてなったんじゃない。私の艇が撃沈されただけなんだよ」
　大統領の演説はたいがいスピーチライターの草稿による。シオドア・Ｃ・ソレンセンはそのチーフだったが、ある時、自分の故郷ネブラスカで教育システムを批判するスピーチを行い、多くのネブラスカの住民を怒らせてしまった。「スピーチライターを好きなようにしゃべらせると、こういうありさまになるのです」（いずれも井坂清・訳）
　なんだ、その程度のことかと思う人もいるだろうが、日本の政治家には“その程度”のユーモアやウイットも飛ばすことがない。いや、ないわけでもない。一月末、国会で“女の涙”論議があった。
「涙は女性の最大の武器だ」という“小泉失言”をやりこめようと、民主党議員が立って四人の女性大臣に感想を求めた。四人の答はそれぞれ秀逸だったが、とどめは川口順子氏（現外相、当時環境相）「私もすばらしい男性の前で涙を流し、女性の武器と言われてみたい」。予算委員会は拍手と爆笑でわき、質問した議員は哀れ形無しだった。
　定義がある。ウイットは人を刺す性質の笑い、コミックは人を楽しませる笑い、ユーモアは人を救う笑いなどという。「女は男よりも簡単に泣く。しかも自分を泣かせたことについて男より長くおぼえている」といったのはフランスのさる作家だが、これはどの分類に入れたらいいか。
　いずれにしても、日本の政治論議にもっと笑いが欲しい。
　先日、最近の大学の教室の教授が「メール私語」のために静かになった珍現象を産経抄で書き、社会言語学の丸山孝男氏（明治大学学長）の『英語ジョークの教科書』（大修館書店）をご紹介したところ、大きな反響があった。同書には六百のジョークが英文対象で紹介されており、英語の世界では先生と生徒は格好の笑いの対象となっている。
　たとえば「退屈でうんざりする先生と、退屈でうんざりする本の違いはなにか？」「退屈でうんざりする本は閉じることができる」。
　この本の紹介に反響があったのは、わたしたちの日々がいかにユーモアやウイットに飢

えているかの証左かもしれない。
　丸山先生は“産経抄の愛読者”だそうだから甘えることにして、もう少し同書から英語のジョークを教えていただこう。
　これは歴史の授業で先生と生徒のやりとりである。
「ヘンリー八世が王位についたときに、最初にしたことはなんですか」
「先生、王はまず椅子に座りました」
　同じく。
「１４８３年になにが起こりましたか」、先生は歴史のテストをやっていた。「ルターが生まれました」、クラスで一番できる女の子が答えた。「そのとおり、ではロス君、１４８８年にはなにが起こりましたか」、先生は一番勉強が遅れている男の子に聞いた。ロスは少し考えてから、「ルターが五歳になりました」と答えた。
　英語の世界では医師と患者のやりとりも。
「先生、私は物忘れが激しいのです」
「それは気の毒ですなあ」
「私は、どうしたらよろしいでしょうか」
「まず、診察料を払ってください」
　男と女の問題も永遠のテーマだろう。
「ぼくは二度も結婚したが、妻にはまったく恵まれていなくてね」
「そうかね、どうしたんだね」
「最初の妻は、ほかの男と駆け落ちしたんだが、二番目の妻はしないのさ」
　丸山教授が京王線に乗っていたら「四人がけ　虎が一頭　横たわり」という川柳が目にとまった。早速、中国と韓国からの留学生にこの川柳を紹介したが、だれも“おかしさ”が理解できなかった。それもそのはずで、「酔っぱらい」は中国では「鬼」に喩え、韓国では「犬」に喩えられるからだった。
　日本人はユーモアのセンスが欠けているとか、ジョークがわからないなどという声があるが、その批判は当たらない。この川柳ひとつとってもわかるではないか、と丸山教授は述べている。（以下略）

（開発官付言）
　「ウイットは人を刺す性質の笑い、コミックは人を楽しませる笑い、ユーモアは人を救う笑い」を心得て、明るい職場となるよう、少し勉強してみたらいかがでしょう。

完